

子どもに、家庭に、学校に、地域に こんな宝が生まれている

教育ファームでの体験を通じて、子どもたちの食と、いのちを育てることに対する気持ちに大きな変化が生まれている。その変化は家庭の親にもおよび、さらには学校の学びにも生かされて教育も変わっていく。何より、指導する生産者や地域の人びとの喜びや自信になり、巡りめぐって地域の宝が育っていく。

3年目を迎えた教育ファームで、どんな宝が生まれているか。本事例集に登場する三つの取り組み 「保育園での幼児期から実践」、「農家を舞台にしたいのち・人のつながりを育む教育ファーム」、「自治体に広がる食育・地産地消をめざす教育ファーム」を取材した。

就学前から農・食体験

子どもも親も生産者も、若さあふれる教育ファーム!

山梨県北杜市 北杜市役所 産業観光部 食と農の杜づくり課

畑に張った黒いのは「マルチ!」

甲府盆地の北西部に位置し、北に八ヶ岳連峰、南に南アルプスを望む山梨県北杜市。

秋も深まった11月のある日、武川保育園の園庭につくられた「げんきももりばたけ」に、こすもすぐみ(年中21人)の子どもたちが元気に集まった。

「今日はここに何植えるんだっけー?」。北杜市役所食と農の杜づくり課、浅川裕介さんがたずねると、「タマネギー」と、一斉にかわいい声上がる。

およそ3m×3mの「げんきももりばたけ」はすでに準備万端。前回の活動で、肥料を撒いたりマルチを張ったりする作業も、子どもたちみんなで行った。

「この黒いの、何だか覚えてる?」

「マルチー!」

すかさず返ってきた正解に、浅川さんや指導農家の秋山澄兄さん、新谷知大さんたちも、思わず「すげえな」と顔を見合わせる。



「ここがタマネギーになります」と秋山さん

僕たちだけで草取りやったよ

この子どもたちが武川保育園の畑デビューを果たしたのは5月のこと。それから月に1回ずつ、秋山さんたちから畑のことをたくさん教わってきた。

土づくりのときは裸足になり、肥料を撒くときにはしっかりそれにさわる。植える前の苗をよく観察して匂いもかいで、とにかく五感をフルに使った農業体験指導にこだわってきた秋山さんたち。その効果もあってか、子どもたちの畑への親しみは回を追うごとに増していき、毎月の活動の合間にも子どもたちだけで虫を取ったり草を取ったり。そして一ヶ月振りにやってきた秋山さんたちに、



「こんなのつくったよ!」

「草取りしたんだよ」「スイカとって食べておいしかったよ」と、前の月からその日までのことを元気に報告するようになる。そしてとうとう、野菜を使って顔のオブジェまでつくる子が!

畑があるだけじゃダメなんです

「土づくりから関わることで、子どもたちが野菜好きになりました」
そう語るのは、小石登子園長先生。

「お誕生日会のとき、好きな食べものをたずねたら“ピーマン!”って答える子がいたのにはびっくりでしたよ」

園で野菜を育ててみようかと、園庭にあった小さなプールを畑にしたのが6年前のこと。でも携わるのは農業などやったことのない保育士の先生たちばかりで、あまりうまくいかなかったそう。子どもと一緒に畑体験などもその頃はまだしていなかった。

それが、2年前に市から教育ファームの話を持ちかけられ、農家の指導を受けられるようになって状況は激変。

「やっぱり、専門の農家の方に教えてもらえるのは全然違います。畑があるだけじゃダメなんです。みてくださる人“がないと”

子どもたちの農業体験もスタートし、畑には途切れることなく季節ごとの野菜がにぎわうようになった。

「春や夏だけでなく秋や冬まで何かしら育てるなんて、園の職員だけではとても考えられないことでした。そうやって定期的に体験できるようになったおかげで、子どもたちがどんどん畑を好きになっていっています。この周辺には農家が多くて、ここにも農家の子が何人か通ってきていますが、家の畑や田んぼに行くことはほとんどないそうです。家の畑より保育園の畑のほうが関わりやすいみたいですね。そしてやってみれば、子どもは本当に土が大好きです。初めはおっかなびっくりの子もいますが、すぐに“裸足になってもいい?”って子どものほうから聞いてきますよ」



「わたしのとったカブ、お母さんも食べてみて〜」

お母さんたちも食べてみてください



小石登子園長先生

タマネギの苗の定植を終え、園庭にもう一つ「やさいランド」の看板を掲げた畑に移動する。こちらには、ブロッコリーやキャベツやカブが青々と葉を繁らせていた。もちろん、子どもたちみんなで育ててきた野菜たちだ。

土から引っこ抜いた白くて丸いカブにそのままガブリとかじりついた秋山さんに、目を丸くする子どもたち。

「うまい!! せっかくだから食べてもらおう」

とれたての野菜の本当のおいしさを子どもに味わってもらいたいという、農家の心からの願い。でも秋山さんの気持ちは、それだけにとどまらない。

「お母さんたちも、ぜひ食べてみてください」

携帯でデジカメでわが子の畑での勇姿を写真に収めていたお母さんたちも、秋山さんたち教育ファームの指導農家が、思いを伝えたい相手なのだ。

子どもたちとの教育ファームを通じて

今年39歳の秋山さん。6年前、農業の持つ魅力や可能性に惹かれ、東京から就農の場を求めてここ北杜市に移住してきた。「これからの北杜の農業の担い手となる、若い農家の方(もう一人の指導農家新谷さんはなんとまだ26歳!)に携わってほしいという思いがありました」と、市役所の浅川さん。

とはいえ、実際の農業経営はそう楽なものではない。忙しく大変な毎日がつづくなか、教育ファームのなかでどんどん変わっていく子どもたちとの触れ合いは、秋山さんにとっても、自分を惹きつけた「農」の魅力に改めて気づかされる貴重な機会になっている。

「そうやっていくなかで、自分たちもより地域に溶け込んでいきたいと思っています」



指導農家の新谷知大さん(左端)と秋山さん(中央)、市役所の浅川さん(右端)を囲んでみんなでポーズ!

つながっていく小さいときの農業体験

北杜市では、武川保育園の他に合わせて五つの保育園で教育ファーム事業を展開している。ご自分の家でも農業をやっていて、子どものときは特に何も考えず手伝っていただけだという担当の浅川さん。「それが今になってこんなふうに農業の大切さを伝える仕事をしているのは、きっとあの頃の体験があったからだと思うんですよ」

小さいときの農業体験はいつか必ず何かの形で現れる。去年、保育園の教育ファームで畑の楽しさに触れて卒園していった子どもたちのなかには、「またつづけたい」と言って、北杜市が別事業で行なっている土日一般参加型の教育ファームに応募してきている子もいるそうだ。

「今後は小学校にも広めていって、せっかく保育園で体験したことが、小学校・中学校とずっと途切れないようにしていきたいですね」と、抱負を語る浅川さんもまだ30歳になったばかり。

若い市役所職員と若い農家たちが、自分たちのさらに次の世代に向けて思いを発信していく北杜市の教育ファーム。この日植えたタマネギが収穫できるようになる来年の春には、みんなはもう年長のお兄さんお姉さんだ。

農家が開く教育ファーム

いのちとのつき合い、暮らしの心を丸ごと体験

愛知県美浜町 季の野の台所

庭に来れば、里帰りしたときの雰囲気

知多半島の南部、里山を背に農家、季の野の台所の森川さんの家がある。山へつづく裏庭には屋根掛けした炊事場があり、水田が見渡せる位置にベンチやテーブルが置かれて、団らんや食事のスペースになっている。庭のあちこちには、教育ファームに来る子どもたちと友だちになったロバ・ヤギ・犬・ニワトリなど、動物たちがいる。

前に来たときにお腹が大きかった母犬が産んだ子犬が、じゃれついてくるうれしさ。山羊を取り囲んであいさつしていると、おっこ。「おっこが出たらすぐにポロポロうんちするよ」と、森川さん。

森川さんの教育ファームは一般公募タイプで、小学生を中心に家族参加する。子どもも親も、車を降りたときから、いろいろな動物との再会と触れ合い、参加者どうしの交流が始まる。里帰りしたときの雰囲気だ。



庭には犬やロバが待っている

農家ならではの季節の食、保存・加工、遊び体験

農家が開設し、田畑や里山を舞台した教育ファーム。ここでは、体験する品目だけでなく、たくさんの自然と作物、暮らしと遊びの体験ができる。森川美保さんはそれを大事にし、例えば、お米コースの田植えの日には、ヨモギを摘んでヨモギ餅、あるいは葦の葉でチマキづくりなど昔からの小昼を体験メニューに加える。また、レンゲやフジの花で天ぷら。若いお母さんたちは、季節感あふれる初体験を大いに喜んでくれる。

大豆コースの植付けの日には、昼食に蒸しパンづくりの他、桑の実で口を紫に染め、ニンニクを焼いてちょっと大人の味体験。梅の氷砂糖漬けなどの体験が加わる。

その梅シロップは、猛暑の活動日に何ともうれしい、かき氷に。秋の稲刈り日は庭のミカンをもいでジュースに、裏山でターザン……というように、農家ならではの季節の恵みと、保存・加工による宝の豊かさを、次々と体験してもらう。



庭のミカンをもいでジュースづくり

大事にしたい! 生き物との触れ合い、つながり

チマキを食べたあと、子どもたちは包んでいた葉をロバにあげに走る。「ロバが食べて土に還るからね」という美保さんのアドバイスだ。夏のそうめん流しに使う裏山の竹は、体験田の自然乾燥のハザにも使う。こんなふうな、ここにはたくさんの「生き物のいのちのつながり」がある。それらひとつひとつを大事に生かしつなく農の暮らしを感じてもらうことが、森川さんの教育ファームの願いだ。

そのために、動物が登場する絵本の朗読の時間をもち、21年度には、一日の振り返りとして、体験した生き物（山羊、イネの花、ロバ、ハザ足などなど）の気持ちを、一人ひとりに書いてもらった。その生き物たちとの交流記録から絵本『季の葉の時間』が生まれた。

22年度は一般公募の他に、半田市内の学童保育に通う4～6年生（花園小・成岩小）と家族が通う教育ファームも始まった。市の委託で学童を運営するNPO法人わたぼうしの方たちの教育ファームへの期待は、「親子、家族で同じ体験をして、いっしょにいのちについて感じ、考え合えること」

一日の振り返りでは、その日の体験を「大事な人への手紙」に書いてもらっている。家族・人とのつながり。この点を、森川さんは22年度の大事な目標に据えている。

お米のいのちも、鶏のいのちも、感謝していただきます



親も子も鶏を解体、いのちを学ぶ

脱穀の日、集まった子どもと家族に美保さんは語りかけた。「今日はいよいよ脱穀です。イネが一生かけて実らせたお米のいのちを恵んでもらいます。お昼は、鶏の五目ご飯です。お米のいのちも、鶏のいのちも、感謝していただくことが大切です」

農業体験では、鶏や合鴨、豚のいのちを断って食べる体験をさせるかどうか議論になる。森川さんは、絞める瞬間については、「うちのお父さんが、痛くなく苦しめない方法で行ないます」と言い、光男さんが目の前で、頸椎外しの方法によって「いつ」と分からね

うちに処理した。あとは、小学生に完全に静かになるまで肢を持って下げてもらうだけ。

親も子どもも、鶏の体温を感じ、毛を抜き、肢と手羽を外し、胸肉・もも肉・ささみを取り、内臓を料理用・出汁取り用・犬用などに分ける。一連の作業を、美保さんから、鶏の体と生理の説明を聞きながら取り組んだ。

そして、肉屋ではケースにたくさん入っているささみが1羽に二つしかないことに驚く。卵巣が現れて「黄身

が大きいから小さいのまでたくさんありますが、これが一羽の鶏が一生に産む卵の数です」「卵道の中のもののは白身がついているね。明日の朝産むのだよ」という美保さんに、大人も子どもも感嘆の声。砂肝から出てきたお米を見て「最後の晩餐だったんだ!」

これまで単なる食品としての鶏肉・卵・砂肝でしかなかったものに、触れがたくもあり、愛おしくもあり、ありがたくもありといった複雑な気持ちと、確かな距離感をもって、それぞれに緊密な関係ができていくようだ。

農家の普段の暮らしが、人と人の良い関係づくりに

この日は、イネの脱穀とともに、ワラ切り・ハザ棒運びなど来年への備え、さらには後日草木染めに使う媒染用のワラ焼きまで、イネの恵みをいただき育む秋の田んぼ仕事を丸ごと体験した。

そして、イネと鶏のいのちをともにいただく昼食。出汁ガラをきれいにしてしゃぶり食べて骨を犬たちにあげ、卵巣など内臓の入った鶏五目も、味噌仕立ての汁も何度もおかわりした。残ったご飯は、普段家で手伝って得意な子が、上手にお握りにしてくれた。

いろいろな田んぼ作業も、野のおやつ楽しみも、鶏さばきも、農家ではごく普通にやってきたことだ。その体験が今、子どもたちの、いのちとの関係、家族・人との関係づくりにとって、大切になっている。振り返りの「大事な人への手紙」では、各人が心に湧いてくるメッセージを書いた。

子から父へ スペシャルな体験をしたで賞

「トリをさばく?? ってビックリしたけどガンバってさばけました!! 一緒にはじめての体験が出来ました」

母から子へ ニワトリのいのち、植物のいのちについてしっかり考えたで賞

「トリをさばくのは勇気がいっただと思いますが、がんばってやれたね。このいのち、大切に食べなきゃと思ったね」

美保さんは、「今日はいろいろないのちをいただきました。心の消化に時間をかけて、何年もかけて栄養にしていってくれればうれしいです」

子どもたちの明日にそんな期待がふくらむ、農家の暮らしの場での教育ファームだ。



脱穀とワラ切り、ハザの片付けまで

食料基地の自治体に広がる 地域の農・食の魅力再発見、いきいき世代交流

北海道名寄市 なよる食育推進ネットワーク

なよる食育推進ネットワークが取り組む教育ファームの指導者や連携団体には、農家、農業団体・企業、料理教室、小中学校、名寄市立大学など、たくさんの人びとが名をつらねる。平成20年にスタートした名寄市食育推進計画には、そのプランづくりに同ネットワークが関与した。このように、市をあげた食育推進の一環として、教育ファームが行なわれ、一般公募タイプと小学校の2本立てで広がっている。

プロ生産者と子どもたちをつなぐ「交わり方」の工夫

一般公募タイプは「教育ファーム ちびっこワンダーランド畑の学校」。事務局のある自然農法の(財)微生物応用技術研究所名寄研究農場の圃場で開かれる。

体験作物は、食料基地名寄の代表品目であるジャガイモ・カボチャ・スイートコーンをはじめ、トマト・ミニトマト・

カラーピーマン・ナス・ダイコンなど。しかし、これらを教えるといっ
ても、プロの自然農法生産者たちの願いや技と、子どもたちの
関心をどうつないでいくか。「交わり方」が課題で、初めは指導
者側も自信はなかった。

そこで、事務局担当者や研究農場の職員がその都度アイディ
アをこらした。苗植えの日には、いろいろなポットを並べて、何
の苗か当てるクイズ。そして、「お手本圃場」(22年度から)で
作業のデモンストレーション。そのあと、家族ごとのミニ菜園に、
生産者が一人ずつついて、温かく見守りながらサポートする、という連携だ。



ちびっこワンダーランド畑の学校

作業体験のなかに「学び」の要素を



おもしろ実験 沈んだトマトと浮いたトマトの味は?

「ミニおもしろ実験」もいろいろ試みている。ナスの実がなったら、
皮の煮汁の色実験。酢やレモン汁(酸性)を加えると赤、重曹(アル
カリ性)で緑、みょうばん(アルミニウム)で紫になる。自然の不思議……これを夏休みの自由研究にした子どももいた。

また、トマトの収穫のときには、「水に沈むトマトと浮くトマト」。20
年度教育ファーム推進事業で作成・配布された『教育ファーム実
践ファイル』で紹介されている実験で、水に入ると完熟しておい
しいトマトは沈む。これを子どもたちは夢中になってやり、赤いおい

しいトマトも、水に浮くまだ青みのあるトマトも大事に食べたという。

こんなふうにして、子ども・家族と野菜のつき合いが深まっていく。年配の生産者たちにとって、畑にきて元
気に飛び回り、喜んで作業し、野菜への関心をもってくれる子どもの姿は、久しぶりでもあり、本当にうれしい
ことだ。

家族の食の楽しみから、さらに明日の産業づくりへ

22年度には、加藤剛名寄市長一家も、2、3、5年生の子と参加した。知らなかった野菜の育ち方から、
加工の仕方まで教えてもらうことがありがたいという。野菜嫌いだった真ん中の子が、トマトでもピーマンでも食
べるようになった。カボチャを子どもがおじいさんにプレゼントしたら、大喜びしてすぐに食べてしまった。そこで「カ
ボチャは倉庫において熟してから食べるとおいしいんだよ!」と、食べ方も伝授。

家族の野菜生活が充実し、交流も深まる教育ファームを「たくさんの人たちに体験してもらいたい。市でも発
信していきます」と加藤市長もいう。そしてこれには、一次産業をベースに加工部門とサービス部門へと展開し、
食と観光で新しい産業おこしをとの願い、施策が重なってくる。

それには、地域の人自身が地域産物や食の魅力を発見して
楽しむこと=付加価値づくりが第一である。教育ファームの取組
みから、それも見えてくる。

例えば、大根のカボチャ漬けづくり(カボチャ入り沢庵)の日に、
子どもたちは昔ながらのカボチャ団子を目を輝かせて作り、スタッ
フに「食べて」とプレゼント。これには指導者側がいたく感動して
しまった。今全国へ出荷され喜ばれている名寄名産のカボチャ
と、この土地で生きる知恵として受け継がれたカボチャ漬けやカ
ボチャ団子が、教育ファームでつながる。



加藤剛市長親子も「大根のカボチャ漬け」まで
しっかり体験

全小学校で、地域の代表作物を体験、新メニューも

小学校の教育ファームは、21年度は智恵文小と東風連小の取組みだったが、22年度には風連下多寄小・風連日進小中学校・中名寄小の3校を加え全校に広がった。

児童・生徒数は1校十数名から多くて30名という小規模だ。1年生から6年生(風連日進は中学3年生まで)と一緒に、上級生が下級生に教えながら米や野菜づくりに取り組む。指導には、老人会、生産者、PTA(生産者)、農業改良普及センターなどが当たっている。

体験する品目は地域の基幹作物と、子どもたちが企画する収穫祭の食材。名寄は日本一のもち米産地で、有名和菓子メーカーにも使われている。寒冷地で米など栽培できないといわれた時代から、地域の人びとが苦労と努力を重ねて今の産地が築かれた。そのもち米が多くの学校で大事な体験教材になっている。収穫祭には風連日進小中の場合、雑煮・黄粉餅・砂糖じょうゆ餅・ごま餅・よもぎ餅、小豆やカボチャなどの入った大福を、子どもと若い保護者が、年配の方の手ほどきを受けて作り、みなさんに振る舞う。

また、中名寄小では、縦割り3チームでそれぞれにつくるカレーを考えて栽培品目を決め、野菜いっぱいカレー・スープカレー・サツマイモチップカレーができた。名寄でサツマイモは珍しく、指導農家に習って今年初めて栽培に挑戦した。小学校で地域の農・食の魅力を体験しながら、新しいカレー料理も生まれた。



名寄名産のもち米を育てて収穫祭(風連下多寄小学校)

うれしい! 気づかされる! 小学校の発表会・収穫祭

地域の農・食体験は生活科や総合的な学習の時間とつながっている。風連下多寄小では、それぞれが調べ学習をし、収穫祭の発表会で保護者・支援者や地域の人びとの前で報告。1、2年生は3人の合同で「学級園活動を振り返って」をクイズも交えながら元気に発表。3年生からは個人ごとに、テーマを選んだ理由、予想、調べた記録、分かったこと、感想などをパワーポイントを使いながら説明し、会場に大きな拍手がわいた。

3、4年生「西風連が育てている作物」「米の生長の様子を調べる」、など。

5、6年生「肥料のちがいでもち米の生長はどうかわかるか」「農具について」「稲の害虫について」「輸入に頼る日本」「野菜の流通」など。

わが産地品目の研究あり、技術の科学実験あり、農業の歴史あり、TPP時代への問いかけありと、大人にとっても、地域の過去から将来への財産や課題が改めて分かり、刺激も受けるような発表会になった。

老人会の方は「1年生から6年生まで一生懸命勉強して、グラフも使って私たちに分かりやすく発表してくれました。とてもよかったです」

保護者からは「家でつくっているイネとアスパラを種から育て、秋までにどうなっているのか記録しての発表で、マイクを使い大勢の前で発表できた」

子どもから地域へのうれしい発信。そんな交流が、市内の全小学校それぞれに起っている、自治体で進める教育ファームだ。



農業の学習成果を全員が発表(風連下多寄小学校)